

「NP1 ヲ NP2 ト V」に関する一考察 —韓国語構文 “NP1 reul NP2 rago/ro V” との比較を 通じて—

金 賢娥

要 旨

本稿では「NP1 ヲ NP2 ト V」構文が従来の引用構文とは異なるということを主張するために、韓国語構文“NP1 reul NP2 rago/ro V”との比較を行う。まず「NP1 ヲ NP2 ト V」での「ト」の意味用法を検討した上で、韓国語の助詞“rago/ro”と「ト」がどのように対応しているかについて示す。次に、先行研究で挙げられている引用動詞の中で「NP1 ヲ NP2 ト V」の形をとる動詞を調べ、各々の動詞が現れた文で“rago”と“ro”がどのように対応しているかを示す。最後に“rago”の場合不自然であった例文を取り上げ、“rago”構文が「ダト」構文と並行的に捉えられることを述べる。このような考察を通じ、「NP1 ヲ NP2 ト V」構文は“NP1 reul NP2 rago/ro V”と並行的に捉えることが可能であり、「NP1 ヲ NP2 ダト V」構文ともまた異なる性質の「ト」を伴うことが明らかになった。

キーワード

引用構文 認識動詞構文 「ト」 「ダト」 “ro” “rago”

1 研究対象

本稿で扱う構文は「花子は太郎を父親と思っている」のような「A ヲ B ト V」という形をとる構文である。従来、「A ヲ B ト V」の構文は典型的な引用構文「A が B ダト V」との比較、つまり、ヲ格の派生過程に関する研究がほとんどであった。例えば、次のようなことである。

- (1) a. 先生は太郎が天才だと思っている。
- b. 先生は太郎を天才(だ)と思っている。

(1b) での「太郎」はヲ格で表示されているにもかかわらず、(1a) と同様に「太郎が天才だ」という主述関係を成している。従来の研究ではこのような解釈の類似性から、ヲ格の派生過程を取り上げ、主に主語の繰り上げや例外的格付与などのような派生過程を通して(1b)のような構文が成立したと述べられてきた。さらにこのような構文は益岡(1981)などで認識動詞構文と呼ばれてきた。認識動詞構文とは、「A ヲ B ト V」や「A ヲ B ク V」のように、ある対象に対してどのように判断しているかを表す構文である。本稿ではこの中でも認識内容が「ト」で表される前者のタイプを扱う。

しかし、「A ヲ B ト V」タイプの認識動詞構文が必ずしも「NP1 ヲ NP2 ト V」のように名詞を伴うわけでない。例えば、(2) のように形容詞や動詞で表現することもできる。

- (2) a. 太郎は花子を可愛いと思っている。
- b. 太郎は花子をこの学校でもっとも優れていると思っている。

本稿では「A ヲ B ト V」の B の位置に名詞が現れた文のみを研究対象とする。

2 問題提起

本稿で、「NP1 ヲ NP2 ト V」のように「ト」が名詞をとる構文に注目する理由は三つの理由からである。一つ目は、(2)のように引用節に形容詞や動詞が現れる構文でのヲ格の出現は随意的であるのに対し、「NP1 ヲ NP2 ト V」の構文ではヲ格が必須に要求されるという特徴が見られるからである。

- (2') a. 太郎は花子が可愛いと思っている。
- b. 太郎は花子がこの学校でもっとも優れていると思っている。
- (3) a. 花子はイルカを鯨と思っている。
- b.*花子はイルカが鯨と思っている。

(2') ではヲ格をガ格に置き換えても文が成立するが、(3)ではヲ格をガ格にすると不自然な文になる。このように(3)のような名詞を受ける認識動詞構文の場合はヲ格が必須的に現れる現象がある。

二つ目は、(4)のような文をどのように位置づけるかという問題である。

- (4) 花子は二郎を太郎と思っている。

森山(1988)は典型的な引用文と(4)のような「～ヲ～ト思ウ」という文の連続性について次のように指摘している。

引用の格成分が、引用成分のなかから抽出される場合がある。すなわち、A ガ「B ハ C ダ」ト思ウ (引用型)→A ガ B ヲ「C ダ」ト思ウ (引用繰り出し型)→A ガ B ヲ C ト思ウ (同定型) のような書き換えが可能である。同定型では、ト格の意味は、引用と言うべきか同定の「と」と言うべきか、微妙な境界上にある。このような一連の現象を引用成分の繰り出しと呼ぶことにする。(森山 (1988、p.80))

森山(1988)の指摘は、「AヲBト思ウ」構文が従来の典型的な引用構文とは異なる性質を有していることを示唆している。このような構文タイプは述語が「思う」である場合だけではなく、判断類の思考を表す述語を取る場合でも見られる。

さらに、藤田(2000, p.122)では発話・思考の普通の「引用動詞」を述語とする引用

構文がヲ格をとる場合を「XヲYト名付ける」の類と「XヲYト考える」の類に分類し、次のように述べている。

「XヲYト名付ける」の類と「XヲYト考える」の類とは、「XガYデアル」という主辞－賓辞の意味関係に立つことになる二項のX・Yを、ヲ格と引用句で分析的に示すものである。この点では、両者は同様といえる。しかし、両者間には大きな相違があるように思われる。というものは、「XヲYト考える」は「XヲYダト考える」のように、Yが名詞的な語句の場合Yに「ダ」を加えることができるのに対し、「XヲYト名付ける」は「XヲYダト名付ける」と書き直すと不自然になる。

(5) その男を犯人だと考えた/断言した。

(5') その男が犯人だと考えた/断言した。

(6) この車をキッツキ号だと名付ける。

(6')*この車がキッツキ号だと名付ける。

藤田(2000, p.122)

(5) が「ヲト」を「ガト」に変えて表現することができるのに対し、(6) ではこのような置き換えが不可能であり、すなわち、ヲの出現が必須的である。藤田(2000) ではこの種のトが基本的に文ではなく名詞にしか後接しないことから一般引用構文の「ト」と区別した。森山(1988)での指摘と藤田(2000)の議論は述語のタイプや構文に対する詳細な記述などでは異なっているが、「AヲBトV」が典型的な引用構文とは異なる性質を持っており、さらにこの場合伴われる「ト」の役割についても「引用」とは性質の異なるタイプの「ト」である可能性を認めているという点では共通している。しかし、上記の先行研究での「同定」が何を意味しているのかについてはより詳しく検討していく余地があると思われる。以上のことを踏まえて考えると、(4)、(6)のタイプの文はヲ格が必須的に要求され、さらにこの場合の「ト」が引用助詞とは異質な振る舞いをするという面から、このタイプの文を引用成分の繰り出しとは言い難いことが分かる。

三つ目に、指摘したいのは「NP1ヲNP2トV」に対応する韓国語の構文が次のように2パターン存在するという点である。

- | | | | | | |
|-----|----|-----------|-----------|---------------------|--------------------------------|
| (7) | a. | 太郎－は | 二郎－を | 友達－ト | 思っている。 |
| | b. | Taro－neun | Jiro－reul | chingu－ rago | saengakhagoitta ¹ . |
| | c. | Taro－neun | Jiro－reul | chingu－ ro | saengakhagoitta. |

以上のような現象を見ると日本語の「NP1ヲNP2トV」構文と“NP1 reul NP2 rago/ro V”構文になんらかの対応関係があるのではないかという予想がつく。

¹ 本稿での韓国語のローマ字表記は、2000年7月1日に「国語のローマ字表記法」として大韓民国文化観光部が告示したものに従う。

本稿では以上のような3点を念頭において、まず、「NP1 ヲ NP2 ト V」の形を取る動詞を分析し、「ト」と「ダト」、「rago/ro」の対応関係を示す。次に、韓国語の“rago/ro”構文との比較を行い、「NP1 ヲ NP2 ト V」が持つ「ト」の機能について論じる。そうすることにより、日本語の中で「NP1 ヲ NP2 ト V」構文を正しく位置づけることができると考えられる。

次節からの本論では、まず、「ト」と「ダト」に関する先行研究を検討した上で「NP1 ヲ NP2 ト V」に対応する韓国語構文“NP1 reul NP2 rago/ro V”の構文について考察し、これらの構文に用いられる「ト」と“rago/ro”の対応関係について述べる。次に、「NP1 ヲ NP2 ト V」をとる引用動詞を調べ、それがまた“rago”と“ro”の出現にどのように関わっているかを検討し、双方の構文を最終的に並行的に捉えることができることを示す。最後に、「ダト」と「ト」が見せる振る舞いが異なるということを主張する。

3 「NP1 ヲ NP2 ト V」と “NP1 reul NP2 rago/ro V”

日本語の「NP1 ヲ NP2 ト V」に対応する韓国語の構文には以下のように①“NP1 reul NP2 rago V”そして②“NP1 reul NP2 ro V”という構文がある。

- (8) a. ミミ- は ナナ- を 医者 - (だ)と 思っていた。
 b. Mimi-neun nana-reul uisa- **rago** saengakhatta.
 c. Mimi-neun nana-reul uisa- **ro** saengakhatta.

本節では、「NP1 ヲ NP2 ト 思う」と「NP1 ヲ NP2 ダト 思う」を比較分析する。さらに、「ト」と“rago/ro”の機能を詳細に検討し双方がどのように対応しているのか考察した上で“NP1 reul NP2 ro V”と「NP1 ヲ NP2 ト V」との並行性について考える。

3.1 「NP1 ヲ NP2 ダト 思う」と「NP1 ヲ NP2 ト 思う」

「NP1 ヲ NP2 ト 思う」と「NP1 ヲ NP2 ダト 思う」は従来ほとんど同様なものとして扱われてきた。つまり、「(X ガ) A ヲ B ト V」は「(X ガ) A ヲ B ダト V」から「ダ」が省略されたものであるということである。これに対し、阿部 (2004) では、次のような操作ができないため、前者が後者の構文から「ダ」が省略されたものであると見なすには無理があると述べている。

- (9) a. みんなはこれを吉報だと思った。
 b. みんなはこれが吉報だと思った。
 (10) a. みんなはこれを吉報と 思った。
 b. *みんなはこれが吉報と 思った。

また、阿部 (2004) は主節の動詞が「思う」の場合は「A ヲ B ダト V」と「A ヲ B ト V」のいずれも取るのに対し、「みなす」、「見る」、「認める」などの動詞は相

対的に「A ヲ B ト V」のタイプを指向する傾向があり、さらに「A ガ B ダト V」の形にするとより一層不自然に感じられると述べている。例えば次のようなことである。

- (11) a. 朴と内藤の一戦**を**決定戦**と**認めることは不可能だろうか。
b. ?朴と内藤の一戦**を**決定戦**だ**と認めることは不可能だろうか。
c. ??朴と内藤の一戦**が**決定戦**だ**と認めることは不可能だろうか。

以上のような現象に対して阿部 (2004) は、「みなす、見る、認める」といったタイプの動詞は何らかの言語的な活動を報告するというよりも、言語が介在する以前の認識や把握といったものを示すのに用いられると論じている。さらに、このような「非言語的認識」という特徴を端的に示すものとして次のような例を提示している。

- (12) その教師は、子供たちが黒を白と信じるように教育している。

例文 (12) に対して阿部 (2004) は、信じる主体である「子供たち」は何か「白だ」あるいは「白い」という命題の形で言語的に認識する前に、すでにそれを白と認識してしまっているという解釈になると述べている。

本稿は、阿部 (2004) の以上のような主張の大きな流れには賛成する立場であるが、「言語的に認識する前に認識してしまう」という説明は検証しにくい側面がまだ存在する。この点についてはより詳しく記述する必要があると思われるが、紙幅の関係上別稿に譲りたい。次節では「ト」と“rago/ro”の用法について詳しく考察する。

3.2 「ト」、「rago/ro」の意味機能

「NP1 ヲ NP2 ト V」と“NP1 reul NP2 rago/ro V”構文の相関関係を明らかにするためには、“rago/ro”がそれぞれ本語の助詞「ト」のどの部分をカバーするのかを明らかにする必要があると思われる。本稿では朴(1997)に従い、まず「ト」の機能について以下のように示す。

「ト」

1) 動作・作用の相手

例) 太郎は次郎**と**ご飯を食べた。

2) 比較の基準

例) 今日の温度は昨日の温度**と**等しい。

3) 変化の結果

例) お湯が水となる、反対の論者を賛成者**と**した。

4) 資格・身分

例) 人間と生まれたら教師になるに限る。

5) 認識・選択の内容、名目、

例) 太郎を次郎**と**思った。

例) 学術発表会の司会者を太郎と決めた、これをPKJの法則と名付ける。

6) 様態

例) 乾燥を山と積み上げる

この中で、以下のように「ト」の3)変化の結果、4)資格・身分、5)認識・選択の内容、名目、用途の用法は韓国語においては“ro”が担う。

「ro」に対応する「ト」の用法

1) 変化の結果

- a. Mul-i orum-**uro**² toenda³.

水が氷と/になる。

- b. Ku ae-ga charaso kun hakcha-**ro** toeotta.

その子供が大きくなって大学者と/になった。

- c. Hwangmujidon kos-I kun toshi-**ro** pakkwiotta.

荒れ地だったところが大都市に変わった。

- d. Chongsu-nun tongsaeng-ul kwahakcha-**ro** mandurotta.

太郎は弟を科学者にした。

2) 資格・身分

- a. Saram-**uro** taeonamyon kyosa-ga toenun kos-i cherida.

人間と生まれたら教師になるに限る。

- b. Chongsu-ga panjang-**uro** ppoyotta.

太郎が学級委員に選ばれた。

3) 認識・選択の内容、名目、用途

- a. Kudul-un na-rul todug-**uro** saenggakaetta.

彼などは私を泥棒と思った。

- b. Chonsu-nun na-rul hyong-**uro** pullotta.

太郎は私を兄と呼んだ。

- c. I kos-ul PKJ-ui popchig-**uro** myongmyonghaetta.

これをPKの法則と名付けた。

- d. Ku-ga otchongji aboji-**ro** saenggaktoenda.

彼がなんとなく父に思える。

² 子音で終わる名詞に後続する場合、“ro”の前に“u”が挿入される。

³ 朴 (1997) での韓国語ローマ字表記は本稿のものと異なるが、本節では原文のものをそのまま用いる。

e. Kimssi-nun nakshi-rul chwimi-**ro** samatta.

金さんは釣りを趣味に**した**。

f. Chongsu-nun sonmul-**ro** yanggawaja-rul kajyowatta.

太郎はお土産に洋菓子を持ってきた。

g. 『Haekshim ilbonogyobon』-ul kyogwaso-**ro** sayonghanda.

『核心 日本語教本』を教科書に使用する。

以上のa~cは「ト」に対応し、d~gは「ニ」の用法に相当する。さらに、朴(1997)は、特に述語が思考・認識、言語活動の動詞の場合は“ro”の代わりに“rago”が使われることがあると述べている。例えば、次のようなことである。

a'. Kudul-un na-rul todug-**rago** saenggakaetta.

b'. Chonsu-nun na-rul hyong-**irago** pullotta.

c'. I kos-ul PKJ-ui popchig-**rago** myongmyonghaetta.

d'. Ku-ga otchongji aboji-**rago** saenggaktoenda.

以上の「ト」と“rago/ro”の対応関係は次のようにまとめられる。

まず、「ト」の引用用法に相当する韓国語には“rago”と“ro”がある。引用用法との境界が曖昧である「認識・選択の内容、名目、用途」の意味機能以外にも「ト」と“ro”は「変化の結果」、「資格、身分」といった共通した意味機能を担っている。さらに“rago”は「ト」が「認識・発話の内容」を表す場合のみ「ト」に対応し、“ro”との置き換えが可能となる。つまり、“rago”は「ト」が担うもっとも引用的な役割のみを担っている。

3.3 「ダト」と「ト」の用法

3.2節では朴(1997)に従い、「ト」と“ro”が以下のような共通の意味役割を担っているとした。

- ・変化の結果：お湯が水となる、反対の論者を賛成者とした。
- ・資格・身分：人間と生まれたら教師になるに限る。
- ・認識・選択の内容、名目、用途：太郎を次郎と思った、学術発表会の司会者を太郎と決めた、これをPKJの法則と名付ける。

(再掲)

しかし、以上の「名詞+ト」を「名詞+ダト」にすると(16)を除き、非文になる。

(13) ??お湯が水**だ**となる。

- (14) ??反対の論者を賛成者**だ**とした。
- (15) ??人間**だ**と生まれたら教師になるに限る。
- (16) 太郎を次郎**だ**と思った。
- (17) ??学術発表会の司会者を太郎**だ**と決めた。
- (18) ??これをPKJの法則**だ**と名付ける。
- (19) ??乾燥を山**だ**と積み上げる

以上の現象は、「ト」のみが名詞と結合する場合、「結果、資格・身分、認識・選択の内容、名目」など様々な用法として実現されるが、「名詞+ダト」の形になると、認識の内容を表すときにしか現れない。このような現象は「ダト」の「ト」が「引用的用法」としてのみ使われるということを意味する。

4 「NP1ヲNP2トV」の形を取る引用動詞

本節では、「NP1ヲNP2トV」構文が引用構文とは異なるタイプの文であることを主張するためにまず、先行研究で「ト」をとる引用動詞として提示された動詞が「NP1ヲNP2トV」の形を取るか否かを調べる。本稿で扱う動詞は引用構文について論じた代表的な研究—仁田 (1980)、森山 (1988)、砂川 (1989)、阿部 (1999)、藤田 (2000)、鎌田 (2000)、阿部 (2004)、小野 (2005)—で挙げられた動詞の中でも人間精神活動を表わす動詞のみを対象とする。以下に詳細を示しておく。

表1 人間精神活動を表わす引用動詞のリスト⁴

思う、疑う、後悔する、まよう、分かる、信じる、確信する、決心する、決意する、決める、推量する、認める、みなす、仮定する、想定する、想像する、推測する、感じる、気づく、見て取る、意識する、覚悟する、期待する、推定する、解釈する、捉える、判断する、見る、考える、認める、予想する、願う、望む、祈る、意図する、企む、もくろむ、誤解する、勘違いする、思い込む、解釈する、後悔する、心配する

以上の動詞の中で「NP1ヲNP2トV」の形を取る動詞のみを並べると次のようになる。以下では動詞のリストを例文と共に示す。かつ、これらの例文に現れる「ト」に韓国語の“rago/ro”がどのように対応するかを示す。

⁴ 研究者によって引用動詞の定義や範囲などについて多様な意見が存在し、その例として提示している動詞の種類も様々である。だが、本稿では引用構文を成す動詞がどのような特性を持っているかを考察することを目的とするため、いくつかの代表的な引用研究で例として挙げられている動詞を合わせ、それについて調べた。

表2 「NP1ヲNP2トV」を取る動詞リスト

	動詞	例文	rago	ro
1	思う	花子は太郎を次郎と思っている。	○ ⁵	○
2	信じる	米連邦捜査局 (F B I) は20日までに、おとり捜査官から渡された偽の爆弾を本物と信じ、シカゴ市内の人込みに仕掛けたレバノン人で同市在住のサミ・ハスーン容疑者(22)を爆発物使用未遂容疑などで訴追した。 (毎日新聞 2010年9月21日)	○	○
3	判断する	協会は03年5月、副理事長の関与したすべての発掘 (162遺跡) の学術的価値を無効と判断した。 (毎日新聞 2010年9月20日)	○	○
4	推測する	参加率を8割と推測する。	??	○
5	意識する	ハーレムを危険な場所と意識せずに、自由に歩き回った。	○	○
6	捉える	意識を根源的な現実把握の唯一の方法と捉えようとすると、[略] (毎日新聞 2010年12月11日)	○	○
7	確信する	警察は太郎を犯人と確信した。	○	○
8	決める	睡眠時間を8時間と決めた。	??	○
9	推定する	08年3月から09年4月までの使用料を約90万円と推定した。(毎日新聞2010年9月15日)	??	○
10	見る	県議の間では、御園氏が官僚出身であることをマイナスと見る声もあるが「県総務部長などを務め、地域の事情に精通している」「財政が厳しい現状では行政キャリアが豊富な御園氏が適任」などの意見が大勢だった。(毎日新聞 2010年9月19日)	△	○
11	考える	外車を富の象徴と考える人が増えている。	○	○
12	認める	札幌高裁は16日、2会派の4件 (計25万3560円分) を違法と認め、西尾正範市長に対し会派に返還請求するよう命じた。(毎日新聞 2010年9月17日)	△	○
13	予想する	今年の使用量を1トンと予想する。	??	○
14	思い込む	会議の時間を8時と思い込んでいた。	○	○
15	勘違いする	太郎はあの男性を女性と勘違いし、話をかけた。	○	○
16	誤解する	彼の社交辞令を好意と誤解してしまった。	○	○

⁵ 「○」は自然に言える文、「△」は発話に違和感はないが、「ro」構文と比べた時「ro」の方が据わりがよい文、「?」はやや不自然な文、「??」は非文に近い文を示す。

17	解釈する	あの科学者の発想を物騒なものと解釈した人も多い。	△	○
18	見なす	著者はメディアについて、「『読者』を『消費者』とみなし、読み手に対するリスペクト（敬意）が欠けている」と指摘する。（毎日新聞 2010年8月31日）	??	○
19	仮定する	ラフに11億ドルを課税遺産と仮定すれば、[略] (毎日新聞2010年9月27日)	△	○

上記の例文の「ト」と“rago/ro”の対応結果を見ると、“rago”は限定的に現れるのに対し、“ro”は全ての「ト」に対応している。さらに興味深い現象は、“rago”と、「ト」を「ダト」にした文が並行的に捉えることができることである。これについては次節で詳しく述べる。

5 “rago”と「ダト」と「ト」

次の例は表2で「ト」を“rago”にすると不自然であった例文を「ダト」に変えたものである。

- (20) a. 参加率を8割と推測する。
b. ??参加率を8割だと推測する。
- (21) a. 睡眠時間を8時間と決めた。
b. ??睡眠時間を8時間だと決めた。
- (22) a. 09年の電気使用料を約90万円と推定する。
b. ??09年の電気使用料を約90万円だと推定する。
- (23) a. 今年の使用量を1トと予想する。
b. ??今年の使用量を1トンだと予想する。
- (24) a. 著者はメディアについて、「『読者』を『消費者』とみなし、読み手に対するリスペクト（敬意）が欠けている」と指摘する。
b. ??著者はメディアについて、「『読者』を『消費者』だとみなし、読み手に対するリスペクト（敬意）が欠けている」と指摘する。

このような現象は“rago”と「ダト」を並行的に捉えることが可能であることを表す。さらに「ダト」の「ト」と、「ト」は形式的には同じであるが、実際には異なる振る舞いをするということを示唆する。韓国語の“ro”が副詞格助詞として様々な用法で使われるのに対し、“rago”は必ず引用文でのみ現れることも「NP1 ヲ NP2 ト V」の「ト」が引用の「ト」と異なるという主張の傍証となる。次節ではこのような主張の根拠となる現象について論じる。

5.1 「NP1ヲ」と「NP2ト」のかき混ぜ

(25)～(28) は「NP1ヲ NP2ダトV」の形をとらない例で、(29)～(31) は「NP1ヲ NP2トV」と「NP1ヲ NP2ダトV」の形を両方とれる例である。各々のb文は「NP2ト NP1ヲ V」のように「NP1ヲ」と「NP2ト」をかき混ぜたものを表わす。

- (25) a. 投票率を5割と推測した。
b. ?5割と投票率を推測した。
- (26) a. 睡眠時間を8時間と決めた。 (再掲)
b. ?8時間と睡眠時間を決めた。
- (27) a. 使用料を約1万円と推定した。
b. ?約1万円と使用料を推定した。
- (28) a. 平均年齢を28歳と予想した。
b. ?28歳と平均年齢を予想した。
- (29) a. 太郎を次郎(だ)と思った。
b. ??次郎(だ)と太郎を思った。
- (30) a. 偽の爆弾を本物(だ)と信じた。
b. ??本物(だ)と偽の爆弾を信じた。
- (31) a. 彼の社交辞令を好意(だ)と誤解した。
b. ??好意(だ)と彼の社交辞令を誤解した。

上記の (25b)～(28b) の例と (29b)～(31b) を比べてみると、(29b)～(31b) が相当不自然な文であるのに対し、(25b)～(28b) は完全に自然な文とは言えないが、(29b)～(31b) に比べて相対的に自然な文になる。つまり、(25b)～(28b) では「NP2ト」が「NP1ヲ」の前方に位置することができるが、(29b)～(31b) では「NP2ト」が「NP1ヲ」の前に位置することができないということである。これは「ト」と「ダト」の「ト」が文法的にも異なる役割を担っているということを意味する。

5.2 否定のスコープ

以下の例文は (25)～(31) の例を否定文にしたものである。

- (25') ??投票率を5割と推測しなかった。
(26') ??睡眠時間を8時間と決めなかった。
(27') ??使用料を約1万円と推定しなかった。
(28') ??平均年齢を28歳と予想しなかった。

(29') 太郎を次郎(だ)と思わなかった。

(30') 彼の社交辞令を好意(だ)と誤解しなかった。

(31') 偽の爆弾を本物(だ)と信じなかった。

(25')～(28') の「ダト」が現れない例では、否定辞が動詞のみを否定しており、文の意味が不自然になるが、(29')～(31') の文では文全体を否定している解釈となり、すなわち引用節の内容まで否定の範囲が及ぶことがわかる。

5.1節と5.2節の現象から考えられるのは、「NP1ヲ NP2ダトV」の形になると許容度が下がる「推測する、決める、推定する、予想する」が構成する「NP1ヲ NP2トV」の「ト」は「NP1ヲ NP2ダトV」での引用の「ト」とは異なる振る舞いをする成分だということである。この際の「ト」はどういう成分なのかという問題についてはまだ検討する余地があるが、本稿では以上のような現象から、「NP1ヲ NP2トV」のみをとる構文の「ト」はそれ以外の引用の「ト」とは異なる性質のものであるということのみを示しておく。

また、(32b) は (25b)～(28b) より一層不自然に感じられるが、その原因については、この場合の「ト」には並列の解釈が優先的に働いているからではないかと考えられる。この点についてはさらなる考察が必要であるため、今後の課題として残しておく。

- (32) a. 読者を消費者と見なす。
b. ?消費者と読者を見なす。
c. ??読者を消費者と見なさない。

6 まとめ

本稿では「NP1 ヲ NP2 ト V」構文が従来の引用構文とは異なるということを主張するために、韓国語構文「NP1 reul NP2 rago/ro V」との比較を行った。

まず、3節では「NP1 ヲ NP2 ト V」での「ト」の意味用法を検討した上で、韓国語の助詞「rago/ro」と「ト」がどのように対応しているかについて示した。その結果「ト」と「ro」は「変化の結果」、「資格・身分」、そして「認識・選択の内容」の共通の用法を持っており、この場合の「ro」は「ト」だけではなく「ニ」とも対応することがわかった。一方、「rago」とは限られた条件でのみ置き換えられることを述べた。さらに、このような「ト」の様々な用法を「ダト」に置き換えると「認識の内容」を表すとき以外は「ダ」が現れないことがわかった。4節では、先行研究で挙げられた引用動詞をまとめ、その中でも「NP1 ヲ NP2 ト V」の形をとる引用動詞を調べ、これらの動詞が現れた例文の「と」と「rago/ro」がどのように対応しているかについて示した。最後に5節では、4節で「rago」の場合不自然であった例文を取り上げ、「rago」構文が「ダト」構文と並行的に捉えられることを述べた。さらに「NP1 ヲ NP2 ト V」を構成し「NP1 ヲ NP2 ダト V」の形を取ることができない動詞に

焦点を当て、これらの構文の特徴について検討した。その結果、このような「ト」はそれ以外の「引用のト」とは異なる振る舞いをみせることがわかった。本稿では以上の考察から、「NP1 ヲ NP2 ト V」構文は“NP1 reul NP2 ro V”と並行的に捉えることが可能であり、さらに「NP1 ヲ NP2 ダト V」構文ともまた異なる性質の「ト」を伴うことがわかった。しかし、この際の「ト」の位置づけ、典型的な引用構文との関連性など、残された問題は多く、「NP1 ヲ NP2 ト V」構文の特性を明らかにするためにはさらなる考察が必要と思われる。この点については今後の課題としたい。

参考文献

- 阿部二郎 (1999) 「いわゆる心内発話について—発話動詞としてみた「思う」—」
『筑波応用言語学研究』6, 筑波大学.
- 阿部二郎 (2004) 『現代日本語における引用句の諸相 : 引用句内の構造を中心に』筑波大学博士 (言語学) 学位論文.
- 阿部二郎 (2010) 「日本語におけるいわゆる「例外的格付与構文」の再考—語順固定型対格付与構文の提案—」第7回筑波大学応用言語学研究会.
- 小野正樹 (2005) 『日本語態度動詞文の情報構造』ひつじ書房.
- 片岡喜代子 (2006) 『日本語否定文の構造 : かき混ぜ文と否定呼応表現』くろしお出版.
- 鎌田修 (2000) 『日本語の引用』ひつじ書房.
- 菊池律之 (2008) 「変化動詞文と共起するニ・トに関する考察—トの意味・機能の分析を中心に」『日本語文法』8-2: 88-103.
- フォコニエ、ジル (1996) 『メンタル・スペース : 自然言語理解の認知インターフェイス』坂原茂 [ほか] (共訳) 白水社.
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』明治書院.
- 丹羽順子 (1994) 「副詞的修飾成分「〜と」を整理する」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』9: 19-28.
- 朴在權 (1997) 『現代日本語・韓国語の格助詞の比較研究』勉誠社.
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
- 송복승 (2004) 「국어의 소절과 ‘-로’의 기능」『言語学』12-2.
- 유현경 (2004) 「국어소절 (small clause) 구성의 복합술어 분석」『國語學』44.
- 이필영 (1993) 『국어의 인용 구문 연구』탑출판사.
- 한송화 (1998) 「불완전 풀이씨에 대한 연구」『국어 문법의 탐구』남기심 역 4
태학사.
- (金賢娥 筑波大学大学院生)

A Study On "NP1 *o* NP2 *to* V" Clause : Examined Through Comparative Analysis With Korean Clause "NP1 *reul* NP2 *rago/ro* V"

Hyunah KIM

This paper suggests that "NP1 *o* NP2 *to* V" is different from typical quotation construction. A comparative analysis on "NP1 *o* NP2 *to* V" and Korean "NP1 *reul* NP2 *rago/ro* V" construction is provided to help demonstrate the suggestion. We discuss the three points as follows.

At first, this paper starts from a study on the meaning of "*to*", which is used in "NP1 *o* NP2 *to* V".

Secondly, the quotation verbs taking "NP1 *o* NP2 *to* V" are clarified with examples, while we discuss semantic restriction of "*rago*" corresponding to "*da-to*" in each clause with the examples.

Finally, Considering the phenomena of scrambling and negation, we show that "NP2-*to*" is distinct from "NP2-*da-to*" grammatically.

We insist that there is a correspondence between "NP1 *reul* NP2 *rago/ro* V" and "NP1 *o* NP2 *to* V", based on the three points provided above.